２０２５年度　子ども・青年の発達と教育分科会　レポートのまとめ（概略）

---

1. 江尻 崇：中学校における「その子」理解と行事を通じた集団成長

宗谷管内の中学校における実践報告です。著者は「その子」という特定性を重視しつつ、生徒が「自分を超える」ことや学級の絆を深めることを目的として、学校行事を通じた集団成長を促しました。運動会や合唱祭でのリーダーたちの葛藤と、他者理解の深まりが、学級通信『My☆Generation』の紙面と共に詳細に描かれています。運動会では「勝って当たり前」という慢心を乗り越え、リーダーたちが工夫を凝らして学年全体の団結を築き上げました。合唱祭では、男子の音程の遅れやリハーサルの失敗という困難を、生徒同士の自主練習や、自由と安心を土台とした思いの共有によって克服しました。また、受験を控えた不登校傾向の生徒に対し、教師の激励が裏目に出た反省から、仲間の行動力を信じて見守る姿勢や、SSW（スクールソーシャルワーカー）や管理職、同僚との共同支援の重要性を説いています。最終的に、一人ひとりに固有の物語があることを認め合い、「何を言っても大丈夫」という安心感のある土壌を耕すことが、子どもの自立と未来を切り拓く力になることを論じています。

2. 柴田 久美子：外国につながる子どもの支援とトランスランゲージング

札幌の子ども日本語クラブでの5年間にわたる実践報告です。北海道における日本語指導が必要な児童生徒の急増と、指導の多くをボランティアが担っている厳しい現状が背景にあります。タイ出身の児童「Aくん」に対し、当初は遊びを通じた関係構築から始め、彼の抵抗や興味に合わせて「4コマ漫画」作成やYouTubeのキャラクター、筆順アプリの活用など、柔軟な教材・手法の開発を行いました。高学年になり、教科学習の難化やAIへの恐怖による情緒の不安定さ、学級内での発言への苦手意識といった課題に直面する中で、単なる日本語教育を超えた「子ども理解」の必要性が述べられています。著者は、複数言語環境に生きる子どもを「移動する子ども」として捉え、彼らが持つタイ語、英語、日本語といった多様な言語資源を肯定的に評価し、フルに活用して心を育む「トランスランゲージング」の教育論を重視しています。『子どもと学ぶ 日本語学習支援ハンドブック』の作成にも触れ、言語マイノリティの子どもたちが学校全体で受け入れられ、自身のアイデンティティを確立できるよう支える支援の在り方を提言しています。

3. 藤澤 彩：小学校におけるチームによる「ケア」と伴走の実践

「困難校」と呼ばれる小学校での勤務経験を通じた、学校における「ケア」の在り方を問う実践報告です。子どもたちの荒れた行動の背景に、大人への不信感や「存在そのものを喜ばれた経験」の欠如を見出し、教師・事務官・公務補が立場を超えて「チーム」として連携する重要性を説いています。個別事例として紹介される児童「S」に対しては、文字への恐怖心を取り除くための「文字の全消し」や、タブレットを用いたフリック入力によるやり取り、できたことの可視化など、徹底して安心感を土台にしたスモールステップの支援を行い

ました。また、家庭環境の課題に合わせ、学校での「食事」まで学習活動・ケアの一環として取り込み、生徒の「意志」を支える伴走を続けました。学級通信『みんなちがってみんないい』では、Sが自ら学び始め、周囲への挨拶や友達との関わりができるようになるなどの劇的な変容が、写真やノートの記録と共に報告されています。著者は、ケアとは特定の役割に固定されるものではなく、日常の「余白」を大切にしながら、複数の大人が「当事者」として緩やかに伴走し続けることであると結論づけています。

4. 市川 瑞葵：高校卒業をめぐる「32通のラブレター」と生徒の変容

初めて担任として卒業生を送り出した高校教諭による、「32通のラブレター」と題した実践報告です。卒業式において全員へのメッセージカードと動画を贈ることで、三年間生徒と共に歩んだ日々を総括しています。レポートでは、中学時代の不登校を乗り越え学校祭でリーダーシップを発揮した生徒や、3年間で3回の特別指導を繰り返しながらも粘り強い対話を経て大学合格を掴み取った生徒、悩みながらも初めての学級委員長を務め上げた生徒など、個性豊かな生徒たちの成長が具体的に綴られています。特に、問題行動を繰り返す生徒に対し「学校をやめることがあなたのためになるならそれでもいいが、まずは課題を終わらせて一度帰っておいで」と語りかけ、絶対に見捨てない姿勢を貫いたことが、生徒自身の安心感と大きな変容につながったことが示唆されています。卒業を前に不安定になる生徒たちの葛藤に寄り添い、教師もまた生徒たちの頑張る姿に助けられていたという実感が述べられています。また、卒業後の挫折を報告してきた教え子に対しても「担任としての仕事は終わっていない」と受け止めており、教育とは卒業で終わるものではなく、生徒のその後の人生に伴走し続ける営みであることを力強く主張しています。